

第72回 日本選手権競輪 GI出場選手インタビュー



グランプリ優勝の代償は大きかった。「運も使い切ったし、その疲労が年明けに出た」。1月からは座骨の痛みが悩まされ、思うような練習ができないままレースに参加する日々が続いた。しかし、2月全日本選抜のあとは状態がみるみる回復。「やっとゼロに戻ったかな」と浅井は安どの笑みを見せる。

あとは上げていくだけ 浅井 康太 三重県 90期



今年も競技メインの多忙なスケジュールは続く。「慣れてきたというよりは、こなすしかない。やり続けるしかない」。そう話す新田だが数少ない実戦でもしっかりと結果を残している。今年初の初戦となった2月全日本選抜で優勝。

ここも強さを誇示する 新田 祐大 福島県 90期



昨年は競技の世界に舞い戻った深谷。「みんなが強すぎるし、いいチーム」と、ナショナルの練習で怪物パワーを再び目覚めさせた。しかし、同時に競輪での出場機会は激減。それでも、気持ちを切り替えて、数少ないチャンスに照準を合わせる。「今後は表に出る機会が減るので、良い走りをしたくない思いはあります。もちろん、しっかりと結果を残したい。(ダービーで決められたらベストですね)。さらに、成果を求めて肉改造にも着手。競技仕様で絞りました。余分なモノがなくなるのはメリットではない。世界を見据えて鍛えた体は、今後の本業にも好影響を与えるだろう。

僅かなチャンスを手中に 深谷 知広 愛知県 96期



「自力で戦っても、しっかりと結果を残したい」と思っている。昨年は新田の番手から2つのGI奪取に成功。しかし、今年初参戦となったウイナーズカップでは、自力で挑んだ2次予選でまさかの敗退。実戦不足が浮き彫りになった。「新田の後ろだったから獲れたと思われするのは嫌なんです。去年の親王牌の準決も自力で上がったし。だからこそ、結果を残したかった。それでも3日目は1秒2の快速まくりで竹内智とワンツー。「脚は問題ない。SSで選抜を走っているので、ラインを連れていきたい」と思っていた。脚力に不安がないことを見せ付けた。

追求した成果 渡邊 一成 福島県 88期



昨年7月福井記念の落車でろつ骨を骨折。歯車が狂いだした三谷だったが揺らぐことはなかった。乱高下する成績のなかで、スケールの大きい走りを買った。「レースが小さくなると、結果も出なくなってくると思う。(S班になっても)変な重圧とかなく、緊張感をもって走れている」。

ダービー連覇へ視界が開ける 三谷 竜生 奈良県 101期



ウイナーズカップを27②着。「いいレースで終われてうれしかった」と、武田豊樹とのワンツーを振り返ったが、シリーズの4日間間は平たんではなかった。「ウイナーズカップの前に(名古屋記念で)落車してたんで、調子は良くなかった。自転車も換えたのもあって、3日間はマッチングが良くなかった。それを決勝で修正できた。それからダービーもそうだし、そのあとと続くんでしっかりと練習期間が取れた」。

新田時代に待った！ 平原 康多 埼玉県 87期



初めてのS班。誰もが、その肩のにかかるプレッシャーと戦う。桑原も例外ではなかった。それでも、邪念を振り払って前を向くことを決めた。「S班の先輩に話をしてもらって。自分で勝ち取ったものに胸を張っていいこと。ワンチャンスをつかめば自分になりたい。そういう弱者の希望の星になりたい」。

自分らしくあり続けて 桑原 大志 山口県 80期



昨年、狙いを定めた弥彦で悲願の地元記念V。そこから怒りの快進撃でビッグ初制覇を遂げ、S班の座をつかんだ。「弥彦の前に自分のなかでこれ以上でできないというくらい練習をやった。だけど、SSになってからも、そのメニューができていない。グランプリの落車であきらめられない気持ちになったんで、まだまだ」。

あきらめないその日まで 諸橋 愛 新潟県 79期

5/3木 12R ガールズケイリンコレクション2018



高木の反撃も見ものだ。ここ一番の勝負強さは児玉を上回るものがあるし、今年も前記のトリアルを含め、5場所連続完全Vを飾るなど進化は止まらない。勝負所を逃さず鋭い踏み出しで前々へと攻め上がり、児玉を脅かす。

児玉碧衣が初戴冠だ！！

1月に高松、奈良、松戸で行なわれたトリアルで上位に入着した7名で争われる今回のコレクション。児玉碧衣のビッグ初制覇へ期待は高まる。3月松山でのコレクションはまたも準Vに終わったが、高木真備、奥井迪をホーム過ぎに叩いて反撃を許さなかった脚は一枚上だ。



児玉 碧衣

高木 真備